沖縄本島北部及び周辺離島の文化財

本島北部及び周辺離島

伊平屋村
伊平屋島
野甫島
具志川島
具志川島遺跡群
(P56-57)
伊是名村
伊是名島
仲田上遺跡
(P60)
伊是名貝塚
(P58-59)
屋那覇島
湧出海岸陶磁器散布地
(P66-67)
伊江村
伊江島
伊江島空港
ナガラ原第三貝塚
(P62-65)
具志堅貝塚
(P36-37)
アンチの上貝塚
(P34-35)
水納島
瀬底島
本部町
安和与那川原遺跡
(P40-41)
ナングスク
(P42-43)
恩納村
金武町
伊芸S.A.
金武I.C.
屋嘉I.C.(那覇方面のみ)
熱田貝塚
(P54-55)
塩屋貝塚
(P52-53)
石川I.C.
金武鍾乳洞遺跡
(P48-49)
読谷村

N
辺土名兼久遺物散布地 (P24-25)
国頭村
古宇利原B遺跡
(P30-31)
喜如嘉貝塚
ワラビンチャー墓
(P26-27)
根謝銘グスク
(P28-29)
運天古墓群
(P32-33)
古宇利島
大宜味村
大堂原貝塚
(P38-39)
今帰仁村
東村
名護市
許田I.C.
宜野座村
宜野座I.C.
前原遺跡
(P44-45)
宜野座又古島遺跡
(P46-47)
奥首の交通遺跡群
(P50-51)
道路凡例
国道
県道主要地方道
県道一般道
高速道路
市町村境界線

国頭村

辺土名兼久遺物散布地

国頭村字辺土名

26° 44′ 40.86″ N
128° 10′ 19.64″ E

用語解説

●遺物散布地
遺物が地表面に散乱している場所を一般に遺物散布地と呼んでいる。

●攪乱
土の中をかき乱すこと。

●掘立柱建物
家を建てるとき、柱の下にそれを安定させるための石を置くことが多いが、その石を置かず、直接、柱の下部を土の中に埋めて建てた家。

●カムィヤキ
奄美諸島に属する徳之島伊仙町の山中に分布するカムィヤキ古窯跡群で、11～13世紀に生産された無釉の焼締陶器。鹿児島県の薩摩半島から琉球列島全域に分布する。

●白磁
磁器の一種。白色の素地に透明性の釉薬を掛け、摂氏1200度以上の高火度で焼いたもの。

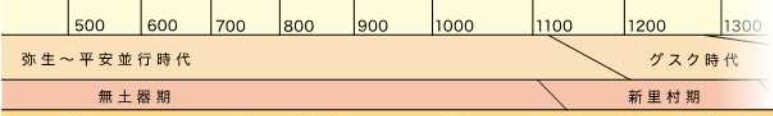
●玉縁碗
碗の縁が丸く膨らんだ碗。

出土遺物

辺土名兼久遺物散布地は、1985～1986（昭和60～61）年に実施した村内の遺跡分布調査により発見された遺跡です。現状は辺土名兼久に広がる住宅地や畑で、弥生～平安並行時代Ⅰ～Ⅲ期（約2300～1700年前）の遺物が広範囲にわたって確認されています。

発見当時には、宅地造成等で地中も攪乱されている可能性が高いと考えられていました。しかし、2018（平成30）年の兼久コミュニティー施設建設に伴う発掘調査によって、掘立柱建物跡が複数確認されました。その遺構から、鹿児島県徳之島で焼かれたカムィヤキや、13世紀ごろに作られたと推定される中国産の白磁（玉縁碗）が発見されたため、グスク時代にはこの場所に集落があったことが明らかとなりました。

【参考文献】
・国頭村教育委員会. 1987.『国頭村の遺跡：詳細分布調査報告』.



発掘調査区全景

徳之島産のカムィヤキや白磁の玉縁碗が確認された グスク時代初期の集落跡

人間が生活するためには、住まいはもちろんのこと、さまざまな道具が必要です。これは、昔も今も変わりません。

また、人間が生きていくためには、食事をしなければいけません。ですから、昔の人々が住んでいた場所からは、食料を貯蔵していた壺や、食べ物を入れるための器のほか、調理をするための道具や、食べていた貝や動物・魚の骨などが、たくさん出土します。

このような遺物は、土の中に埋もれていることがほとんどですが、地面の上に顔を出すことがあります。それは、雨が降ることによって、土が流され遺物が露出（むき出しになる）する場合や森林や荒れ地等を切り開いて住居や畑を耕す時などです。

このようにして遺物が地表面に現れている場所を遺物散布地と呼び、その広がりを遺跡の範囲とすることもあります。

沖縄県では、「辺土名兼久遺物散布地」をはじめとして、名護市羽地の「真喜屋平田遺物散布地」など、様々な地域で、遺物散布地が見つかっています。

みなさんも遺物散布地へ行くと、昔の人々が使っていた道具や容器の破片等を見つけることができるかもしれませんね（ただし、遺物を持ち帰ることはできませんので、注意してください）。

【画像提供】国頭村教育委員会

大宜味村

喜如嘉貝塚 ワラビンチャー墓

大宜味村字喜如嘉

26°42′29.06″N
128°8′34.91″E

用語解説

●砂丘地
海岸の砂が吹きあげられてできた丘。

●大宜味村農村環境改善センター
ホールや会議室、研修室、調理実習室などがある地域住民の交流の場。大宜味村の工芸展「いぎみていぐま」等、様々なイベントが行われている。

●獣魚骨
イノシシ等の動物や魚類の骨。

遺跡全景

喜如嘉貝塚は那覇市から約90km北に位置する字喜如嘉に所在しています。遺跡は東シナ海と喜如嘉川、国道58号の旧道に挟まれた三角地帯にあり、標高3～5mの砂丘地に立地しています。1979(昭和54)年に大宜味村農村環境改善センターの建設、1994(平成6)年には国道58号改修工事に伴い発掘調査が行われました。その結果、弥生～平安並行時代Ⅳ期(約1700年前)の土器や石器等の生活道具や貝製品、先人達が食料としていたと考えられる貝類や獣魚骨等が出土しています。

国道58号改修工事の時には、喜如嘉貝塚に隣接するワラビンチャー墓と呼ばれる場所も確認調査が行われました。40基の墓が検出され、その多くはテーブルサンゴを立てて長方形状や正方形状に組み、蓋を被せたものです。墓の中には遺物や人骨はほとんど見られませんでしたが、周辺から出土した陶磁器類や金属製品等から近世に造られた事がわかりました。

また、喜如嘉貝塚の発掘調査区内では、2体の埋葬人骨が検出されました。

【参考文献】
・大宜味村教育委員会. 1979.『喜如嘉貝塚発掘調査報告書』.
・沖縄県教育庁文化課. 1994.『喜如嘉貝塚：国道58号改修工事に係る緊急発掘調査』.

発掘調査風景

1700年前の海辺の生活の跡や近世の墓が残っていた遺跡

遺物出土状況

ワラビンチャー墓全景

埋葬人骨

【画像提供】大宜味村教育委員会

大宜味村

根謝銘グスク

大宜味村字田嘉里

26°42′34.45″N
128°9′41.65″E

用語解説

●舌状丘陵
人間の舌のような形をした、なだらかで細長い丘のこと。

●尾根筋
山の頂上に続く土地の高い部分の連なり。

●掘切
敵の侵入を防ぐために堀られた溝。

●英祖王
1229年生まれ、1299年没。母親が太陽の夢を見て、英祖が生まれたという伝説があることから、「太陽の子（てだこ）」と呼ばれている。1260年、王となり浦添を中心とする地域を支配した。その後、久米島、慶良間、伊平屋や奄美大島も治めた。

●按司
13世紀ごろに誕生した地域の支配者。

●交易
互いに品物を交換や売買すること。

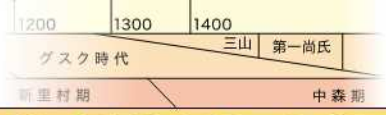
神アサギ

遠景（喜如嘉ターブックゥより）

根謝銘グスクは字謝名城と田嘉里の間に位置し、かつての城村の集落背後にせまる舌状丘陵の先端、標高約100mの地点に形成されています。頂上部に古期石灰岩が混在する土塁を巡らし、尾根筋は堀切で切断しているのが特徴です。

このグスクは国頭按司の居城とする説と英祖王の子孫である大宜味按司の居城とする説がありますが、地域の歴史をまとめた『国頭村史』や『大宜味村史』では、グスクの規模や港の所在等からみて、国頭按司説が有力とされています。表面調査や試掘調査により土器や中国産青磁、陶器、カムィヤキをはじめ、石器や貝製品等が出土しており、海外交易ができるほど勢力のあった者が使用・居城していたことが考えられます。

【参考文献】
・国頭村役場. 1967.『国頭村史』.
・大宜味村史編集委員会. 1979.『大宜味村史 通史編』. 大宜味村役場.
・大宜味村総務課. 2015.『根謝銘グスク整備・活用基本計画』.



堀切

奥深い山中にある大きなグスク。今でも地域の人々が守り続けている。

土塁

石積み

出土遺物（青磁・土器・石器・貝製品）

【画像提供】大宜味村教育委員会

今帰仁村

古宇利原B遺跡

今帰仁村字古宇利下原

26°41′49.52″N
128°1′13.42″E

用語解説

●**骨牙製品**
動物の骨や牙（イノシシなど）で作った道具やアクセサリー。古宇利原B遺跡からは針やキリなどが出土している。

●**獣魚骨**
イノシシ等の動物や魚類の骨。

●**竪穴住居跡**
地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。

●**炉跡**
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。

●**岩盤**
岩石でできている地盤。

●**痕跡**
以前、何かがあった事を示すあと。

●**石斧**
石製の刃を付けた斧。木製の柄に取り付けて使用する。

竪穴住居跡検出状況（2013年度）

古宇利島は本部半島の北東海上に浮かぶ小島で、2005（平成17）年には古宇利大橋が開通し、沖縄島から車で行き来できるようになりました。

古宇利原B遺跡は島の南端にある集落の東側に位置しています。縄文時代後期から晩期（約3500～2300年前）にかけての遺跡で、これまで3回の発掘調査が行われました。

調査の結果、多くの土器や石器、貝製品・骨牙製品、貝殻・獣魚骨等の遺物が出土しました。その他、当時の人々が生活していた竪穴住居跡や、調理を行っていた炉跡も見つかっています。竪穴は岩盤まで掘り込まれ、周囲には石を積んでいた痕跡があり、炉跡は住居の中と外で確認できました。また、住居のひとつからは石斧が約10点まとまった状態で出土しました。

この遺跡は当時の人々の暮らしぶりを知ることができる貴重な文化財です。また、石斧等の石器の材料は、古宇利島で採れるものは少なく、島外から持ち込まれたものがほとんどなので、他の地域との交流が盛んだった事がうかがわれます。

【参考文献】
・今帰仁村教育委員会. 1983.『古宇利原遺跡発掘調査報告書』.
・今帰仁村教育委員会. 2004.『古宇利原B遺跡発掘調査報告書』.
・今帰仁村教育委員会. 2005.『古宇利原A遺跡』.
・今帰仁村教育委員会. 2006.『古宇利島の遺跡』.

遺跡全景

3500年前の人々の暮らしぶりを知る事ができる遺跡

炉跡

竪穴住居礫

竪穴住居内 石斧出土状況

【画像提供】今帰仁村教育委員会

今帰仁村

運天古墓群

今帰仁村字運天

26°40′57.53″N
128°0′17.86″E

用語解説

●北山監守

尚巴志が北山王を滅ぼして、北山（現在の北部）一帯を監視し、守るために1422年に設けた役職。第二尚氏の時代になっても続けられたが、1665（尚質18）年に廃止。

●木棺

木材で作られた棺（死んだ人を納める容器）。

●漆

ウルシの樹皮に傷をつけて採取した樹液（生漆(きうるし)）に、油・着色剤などを加えて精製した塗料。乾燥すると硬い膜を作り、水や酸に強くなることから長持ちする。発見された木棺には、朱漆が塗られていた。

古墓群遠景

運天集落の背後にそびえる崖に、グスク時代から近世まで使用された約60基の墓があります。これらには、琉球国時代に首里から派遣され沖縄島北部を統治していた北山監守一族が葬られた「大北墓」や、16世紀以前のやんばる地域の有力者達の墓とされる「百按司墓」が含まれ、その他にも岩壁を掘り込んで作られた多くの古墓があります。

「百按司墓」と呼ばれる5基の墓には、崖の中腹の岩陰に木製の家型墓を建て、その中に遺骨を納めた木棺を安置したものがあります。1882（明治15）年頃に3基の家型墓を漆喰で固めた石積みで囲う工事が行われました。現在、家型墓は1基のみが残っています。木棺には漆が塗られ、屋根の形をした蓋がついていました。漆塗りの木棺は、県内でもほとんど例がなく珍しいものです。

運天古墓群には、崖の壁面に横穴を掘り家型墓を建てたものや、入口を板でふさいだもの等があり、沖縄の墓の成り立ちや構造を考える上でも重要な遺跡です。

【参考文献】
・今帰仁村教育委員会. 2004.『百按司墓木棺修理報告書』.
・今帰仁村教育委員会. 2013.『運天古墓群Ⅰ』.
・今帰仁村教育委員会. 2012.『運天の古墓群：百按司墓・大北墓』.
・名嘉真宜勝. 1999.『沖縄の人生儀礼と墓』. 沖縄文化社.
・仲原弘哲. 2004.『今帰仁の墓調査から』. *In*：浦添市教育委員会（編）.『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』.

崖中腹の掘り込み墓

沖縄の墓の成り立ちや構造を考える上で重要な古墓群

大北墓

百按司墓

百按司墓出土木棺復元資料展示

【画像提供】今帰仁村教育委員会